

千歌（M）「そんな私の目の前で、先輩が：
：：：私をかばって、私の身代わりになって
：：：：」

間

千歌（M）「ハッと我に返ったときにはもう、
先輩のおろしたての白シャツが、真っ赤に
染まっていた：：：：」

乗務員（男）の声「抑え込め！」

千歌（M）「あのとときの光景が、昨日のこと
のように、忘れられない。私に覆いかぶさ
るようにして倒れた先輩の、足元で、銀色
のフルートが転がった：：：：」

ニュース「最新情報をお伝えします。台風一
五号は二二日午後九時現在、変わらぬ勢力
で未だ北上を続けており：：：：」

真奈美（千歌の母）「（ニュースにかぶせて）
千歌、いつまで入っとなのッ」

千歌（M）「浴槽でうとうととしていた私は、
お母さんの一言で目が覚めた」

千歌「え！」

千歌（M）「と、胸の中から鬼火が顔を出していた。浮かび上がり、そのまま、窓の外へ……」

SE カーテンを開ける

と、大雨

千歌（M）「部屋に戻った私は、カーテンを開き、鬼火を探した……」

SE 窓を開ける

大雨の音、さらに激しく

千歌（M）「ベランダに出て、辺りを見回す……と、そこに、路上に、雨に打たれども消えることのない鬼火が、青白い鬼火が、漂っていた」

SE ドタドタと階段を降りる

千歌（M）「まるで私を、誘っているかのようだった」

真奈美「どこ行くのッ。こんな夜更けに」

SE 玄関ドアを開ける

千歌（M）「鬼火が、遠ざかっていく」